講演2

Missionary and Anthropologist, a Contradiction?

クネヒト・ペトロ
（南山大学・元教授／人類学研究所・元所長）

ご紹介にあずかりましたクネヒトです。私の話は先ほどの山田先生のようにスムーズなものではないかもしれません。ですので、その点、あらかじめご理解いただければと思います。

おそらく、この話のタイトルを見て、ちょっと変だと思うかもしれません。実に変です。今年の秋、1カ月ぐらい前に、京都で開催されていた研修会で聴講生の1人に「あなたは司祭でありながら、どうして人類学をやっているのですか。矛盾しているのではないですか」と聞かれました。言われて、「ああ、なるほど」と思いました。考えてみれば、宣教師の活動を批判する人類学者は決して稀ではないので、宣教師が人類学者として活動するのは相矛盾している事情に見えるでしょう。しかし、よくよく見ると2者の活動の目的は異なっているにも拘らず、それぞれの目的に達する方法に案外互いに似ている点があるのではないかと思われます。というのは、両者の活動の根拠は対象にしている文化を出来るだけ正確に理解することです。それ故、一目で矛盾しているようにみえる人類学者と宣教師のそれぞれの基本的態度はむしろ互いに相互協力関係にあり得るのです。実は、このような考え方は南山大学、とくに南山大学人類学研究所の設立と活動の動機であるので、これについて少し話をしたいと思います。

私の話は、先ほど山田先生が述べたような、きちんと整理された学問的な話ではないので、一つの物語として聞いていただければ有難いと思います。

基本的に、人類学研究所と何らかの関係があった3人の人たちについて話すつもりです。一人目は、先ほど、山田先生が話したW. シュミットです。もう一人は、おそらく本日の聴衆のなかで彼を知っている方がほとんどいないM. エーデルという人です。そして、最後は、この私です。どうしてそうしたかというと、この3人を結んでいる絆が宣教師であるから、そして南山大学人類学研究所と関係をもっていた人類学者であるからです。

南山大学人類学研究所設立70周年記念シンポジウムの席で上記のテーマで話すというのは、異質で関係のない出来事に見えるかもしれませんが、実はこのテーマは研究所の設立準備の段階以来大いに関係があった問題と課題であったことを指し示しています。

南山学園の母体が神言会というカトリック宣教会であるため、宣教会の宣教活動と高等教育が互いにどのような関係にあるべきかという問題は、早いころから議論の種でした。あるいは、現在でも存続している問題であるような気がしています。本日、3人の会員が研究所の設立とその後の研究活動にどのように関連していたかについて語り、研究所の存在理由について話してみようと思っています。

神言会とは、1875年に教区司祭であったドイツ人のアーノルド・ヤンセン（Arnold Janssen）が設立したカトリック宣教修道会です。しかし、創立者は、最初のころから、会員の世俗的な学問の勉学を重視して、専門研究の才能を見せた若い会員たちに大学での自然科学の研究を

含めて、研究を許可しました。この方針に従って選ばれた若い会員の一人がウィルヘルム・シュミット（Wilhelm Schmidt）でした。

彼はベルリン大学で1893年から1895年まで学びました。こう言いますと2年勉強したように見えるのですが、実はそうではありません。1年ちょっとだけです。どうしてそうなったかというと、創立者が「長く勉強すると高慢の気持ちが起こる可能性があるので、これを避けるべきだ」、何故なら、会員学者が「謙遜な者でなければならない」と創立者が考えたからです。

約1年半、大学でヘブライ語と古典アラブ語などの中近東の言語を学びました。こうした言語の研究は、これらの言語が聖書の解釈学をはじめ、中世の哲学、つまりスコラ哲学にどのように影響を及ぼしたかを明らかにする場合に役立つと彼は考えたわけです。さらに、この言語の研究は比較宗教学の研究において多大な意味をもっているとも考えていました。別の言い方をすると、彼は、これらの諸言語の「世俗的」な研究に力を入れたら、言語学そのものをマスターできるのみならず、宗教の研究と、とくに後輩が学ぶべき神学の研究のためにもなると考えていたわけです。

ベルリン大学を離れた1895年からシュミットは、ウィーンの郊外にあるSt.Gabrielという神言会の若い宣教師を養成する神学院で、主として言語学を教え教鞭を執っていました。そのとき、彼の将来の研究活動に極めて大きな影響を与えた2つの出来事がありました。

一つは、ウィーン大学の教授、L. ライニシュ（Leo Reinisch）との出会いです。教授はハム族の研究者で、とくに比較言語学の著名な方でした。教授の指導の下で、シュミットは比較言語学の方法を身に付け、洗練させました。その訓練の結果、初の専門的な学術研究成果を刊行しました。これは、メラネシアやポリネシアなどのオセアニア地域の諸言語の事情と民族学におけるそれらの意義についての論文でした（Schmidt 1899）。

また、もう一つは、ライニッシュ教授に誘われて、英国の人類学者アンドリュー・ラング（Andrew Lang）がウィーン大学でおこなった講演に列席したことです。講演の課題は、原始民族の神信仰でした。シュミットはラングの考えにそのまま同感したわけではありませんでしたが、原始民族の信仰のあり方を歴史学的な方法で明らかにしようというラングの試みから重要なヒントを得ました。つまり、自ら追究してきた比較言語学研究の歴史学的な方法で、広い地域にわたって特定の諸言語の広まり方を立証しようとするシュミットの方法と似た方法でラングは原始民族の神信仰の歴史的位置を示せるのではないかと気がついたわけです。また、もしこの研究が成功すれば、人類学・民族学という世俗的学問が宣教師たちの努力を後押しできるとも判断したわけです。

分析できる資料の問題について、シュミットは、宣教師が現地の宗教や慣習などについてユ

ニークな経験と知識をもっているので、それを欧米の研究者たちの手元に提供すれば、高度な信憑性の資料を基にした学問の進歩を促すことになるに違いないと考えました。従って、シュミットは、一方で、神学院で宣教師の若い候補者たちに異文化についての関心と正確な観察力を養うのに努力しますが、他方では、宣教師の現場から届いた報告をまとめて、それを専門雑誌でもって学界に提出するために民族学と言語学専門誌『アントロポス』(Anthropos)を1906年に発行し始めました。

なお、宣教師が蒐集した資料を大勢の研究者たちに専門的に分析し研究してもらうために何人かの神言会の学者会員を集め、雑誌を発行し始めた頃より約30年後の1932年に、シュミットは「アントロポス研究所(Anthropos Institut)」という名の民族学研究所をSt. Gabriel修道院内に設立しました。

シュミットは、普通の意味での宣教師でもなければ、特定の社会において所謂フィールドワークという現地調査を実行した人類学者でもありません。彼は全力を尽くしたデスクワーカーであり、主として大学または自分の書斎で働く人でした。

しかし、1935年3月からその年の年末にかけて、世界一周旅行をする機会が彼に訪れました。旅行の途中で、中国と日本にも立ち寄りました。そして、文化の高いこの2カ国で一生懸命に働き尽力している宣教師の態度を認め、評価しながらも、それを時に厳しく批判したこともあります。

かれが批判したのは、宣教師の努力の熱心さではなく、努力の対象にしている文化に関して示した関心と知識の足りなさでした。彼の見解によると、中国と日本では教会の宣教努力を成功させようとしたら、主として田舎の農民人口を相手にするよりも、まずインテリの人々をそれにすべきであるということでした。しかし、そうであれば、宣教師は活動するそれぞれの国の文化を深く学ぶ必要があるとし、母体の神言会にはその目的に大学や研究所を営むことが大事だと主張しました。

旅行の当時、日本ではまだ神言会が開いた大学はありませんでしたが、シュミットがヨーロッパで設立したAnthropos Institutに因んだ支部として民族学研究所を創立するように強く望んでいました。その願望を南山学園の担当者に提出し、一応受け入れてもらったわけですが、その後、太平洋戦争が激化したために、この話は棚上げされてしまいました。戦後、南山大学が設立された1949年の秋に、南山大学の初代学長アロイジオ・パッヘ(Aloysius Pache)師の支持を得て、「人類学・民族学研究所」がいよいよ創立を見たわけです。

そして、シュミットの弟子である神言会員の沼澤喜市が初代所長に就きました。しかし、新研究所の組織は、形質人類学をはじめ、民族学、考古学と言語学を含めたものだったので、シュミ

ットは沼澤所長に宛てた手紙の中で強い不満を表したそうです。

南山大学の発展に伴い、研究所は1954年に「人類学研究所」に改名しましたが、大学校内での立ち位置は一朝一夕には確立しませんでした。そして、研究所に機関誌が必要だと判断され、『Man and Culture』という題の専門誌の編集と発行が企画されたのですが、運悪く実現しませんでした。大学紛争の不安定な時代を経た後、研究所の組織は一時凍結されましたが、1972年の再出発時にやっと『人類学研究所紀要』を発行することができました。

当時、人類学研究所の研究員として神言会の研究者は極めてまれな存在となっていましたが、10年ほど前に、名古屋の外から、わずかですが援助がありました。Anthropos研究所の所員でもあった神言会員のマティアス・エーデル（Matthias Eder）でした。彼は東京に住んでいて、週に一回ぐらいの割合で南山大学へ通っていましたが、1973年に名古屋へ引っ越し、回復された研究所で部屋を与えてもらいました。彼が来たときに、自分が編集していた雑誌『Asian Folklore Studies』、正確に言うと、当時の『Folklore Studies』を持参して人類学研究所で発行を続けましたが、実際、この雑誌は既に1963年から人類学研究所の名で発行されるようになっていました。しかし、それは名前だけでした。

この雑誌はもともと『Folklore Studies』という題目で刊行されていましたが、人類学研究所のものではありませんでした。エーデル師が1942年に北京の輔仁（Fu Jen）大学の「東洋民族学博物館」の機関誌として刊行し始めた民俗学の専門誌でした。中国の政治事情が変わったことに伴い、エーデル師は1949年に慌てて出国し、雑誌とともに中国から日本へと渡り、差し当たって東京で雑誌を継続して発行するのに尽力しました。

近いうちに再び北京へ戻れるだろうと推測しながら、最初の3年間は、「東洋民族学博物館」の名で雑誌を発行して続けていましたが、1963年以来、名称が『Asian Folklore Studies』に改名されるとともに、正式に南山大学の人類学研究所で発行するようになりました。

編集担当者のエーデル師は、若い宣教師であった頃に、日本の宣教地に赴任するように任命を受けて来日しました。短期間で日本語を学んだ後、教会の務めもしましたが、主として高等学校で教鞭を執っていました。しかし、日本で従われていた宣教方法に不満をもち、それをよく批判していました。なぜなら、日本文化を深く知らなければ、本当の宣教が不可能ではないかと確信していたからです。そうした不満が次第に強くなるにつれて、自分はこのような宣教法に向いていないと感じてきました。代わりに、自分が日本文化を専門的に研究すれば、身に付けた文化に関する知識を宣教師たちに提供しながら、かれらの活動に大いに貢献できるのではないかと信じていました。

1935年、いよいよ彼の夢がかない、ヨーロッパの大学で日本文化研究を追究する許可を得

ることができました。3年後の1938年にベルリン大学で博士号を取り、再度東洋へ出発しましたが、今回は日本ではなく、北京の輔仁(Fu Jen)大学へ派遣されました。

やがて、当大学の「東洋民族学博物館」を設立し、1942年、その機関誌として『Folklore Studies』を発行し始めました。その雑誌を発行し始めた理由は、とくに西洋と西洋以外のフォークロア学者たちの研究交流の場にするという考えでした。なぜなら、洋の東西を超えて、学者たちが異文化の相手の研究から学ぶべきことが多いと思っていたからです。

私は、来日して東京で日本語を学んだ際、初めてエーデル師に出会い、同じ家に住んでいました。彼の編集作業に関心をもち、日本語を勉強する傍ら、時には彼の編集業務を少し手伝う機会もありました。

日本に赴任した際、私は将来、教会で仕事をするか、それとも神言会が経営している学校に勤めるか未定でした。しかし、教会での仕事に向いていない気持ちは最初から強かったです。しかも、日本語の勉強が進んでいくにつれて、日本語の意味と自然な使い方を正確に学ぼうとするなら、学校で身に付けた日本語力には重要なところが足りないと、私はおおいに感じてきたわけです。社会の中に生きている言語と、その社会の環境を現場で経験したい気持ちが沸いてきました。

ある日、沼澤喜市師にその考えを打ち明け、将来の仕事について相談すると、師は、できるなら日本の大学で勉強すればいいだろうと勧めてくださいました。従って、日本語学校を出た後、東大の大林太良先生を紹介してもらい、先生の指導を受けながら受験の準備を始めました。先生が読むように勧めてくださった書物には英語の文化人類学入門書が含まれていましたが、私に深い印象を与えたのは、折口信夫の『古代研究 民俗学篇』の2冊でした(折口1929, 1930)。

ここまで日常的な日本語を学んでいたので、折口の本を読もうとしたら、漢字も文章もあまりにも難しかったので、諦めて投げようかと思ったこともあります。しかし、今、振り返ってみると、折口の本は私に2種類の大事なことを教えてくれました。一つは当用漢字以前の漢字の読み方で、もう一つは日本の民俗文化の魅力でした。それで将来の、私の歩めそうな日本人をより深く知る道が決まった気がしました。

運良く東京大学に籍を得て、日本で文化人類学を学ぶ門が開かれました。しかし、ある重要な問題が一つ残っていましたし、それをだんだん、一種の重荷と感じつつありました。当時住んでいた家は、ほとんど外国人ばかりが生活している、日本国内の「居留地」めいた世界でした。肌で日本文化に触れる機会をいかにつくろうかと思い巡らした際、大学の先輩にこの考えを明かしました。彼は快く私の希望を聞いて、やがて現地調査ができそうな地域を紹介してく

れました。それが、ここにいらっしゃる伊藤亜人先生です。その当時はまだ先生ではなく、文化人類学研究室の助手でした。

お盆の時に、彼とその家族の案内で東北の何カ所かに下見に出掛けました。その時に、イタコの儀礼を観察する機会もありました。山村を歩いて、数人の住民と調査の可能性について相談する機会ももちました。東京へ戻って、見てきた村々のうちの一つを選んで、今度の調査地に決めました。下調べの旅行から一旦東京へ戻ったが、出来るだけ早く調査を始めようと思い再びその村へ出発しました。しかし、調査は思ったように楽なものではありませんでしたが、今、振り返ってみるとこの状況こそが日本の日常的生活に「潜る」のに、苦しくても貴重な「入社式」となりました。

その頃、寂しい思いをして独りで山道を歩いたことも何回もありましたが、村民のある会合に参加した際、いきなり「あなたは仲間なので、我々の話が分かるだろう」と言われ、嬉しかったです。忘れ得ない瞬間でした。

大学時代に研究や調査を進めるうちに、宣教師としての教会活動をほとんどしなかったどころか、次第にそうした活動に一生力を尽くすのに向いていない感じが決定的になりました。大学院を修了して南山大学に着任し、宗教人類学などの授業で教鞭を執り始めました。カトリックの宣教師なので、いわゆる福音を宣べて伝えることが第一の使命のはずですが、大学の講義では、そうするよりも、学生たちに対し、「宗教」という人間社会の一現象に関する基本的な理解と、偏見のない評価の態度を育てるのが先ではないかと判断しました。

というのは、「宗教」あるいは「信仰」を、各地の文化の中で一つの側面として生まれてくるものだと考えれば、文化を理解することによって宗教の理解が深まり、より豊かになるのではないかと感じたからです。そういう意味で、私は、人類学的な文化研究が宣教師にも欠かせないばかりか、彼らの業務に、間接的ではあるが手助けとなる視座を提供し得ると考えています。

エーデル師は1980年に急逝しました。以前から時々彼の編集作業を時間が許す限り手伝うことがあったが、いよいよ自分が本格的に『Asian Folklore Studies』を編集する時が来ました。

原則的にエーデル師が確立した編集方針に倣いながら、アジアの研究者、あるいはアジアの諸文化に関する研究を優先させることにしました。しかし、作業上、重大な問題があるとすぐに分かりました。というのは、アジア出身の研究者が編集室に提出した論文のレベルは欧米の研究者のそれと比べると、そのレベルに達し得ないものが稀ではなかったのです。一方で、彼らが提示する資料の中には、外国の研究者にも役立つと思われるものが少なくなかった。しかし、こういうものを、他の論文と並べて発表できるかたちにするのに多くの手間がかかり、私に

はできない技だと理解せざるを得ませんでした。従って、その技をコピーエディターに頼むことにしましたが、その方の手を随分煩わすことがしばしばありました。

しかし、いわゆる「異文化」を少しでも理解しようとするならば、その文化に生きる人々の声を丁寧に聞き拾うべきであると確信していました。確かに、こういう扱いを基にした作業は、宗教と直接に何の関係もない場合が多かったですが、異文化の宗教に関して私自身の態度とは少しも異なるものではありませんでした。私が大学を定年退職した年、長年編集を担当してきた雑誌の題は『Asian Ethnology』と改名され、編集方針も変更されました。

南山大学から離れた後、私は、あるキリスト教系大学所属の宗教研究所で、日本の諸宗教に具体的な体験を以て接触しようとする外国人の研修生たちに日本の庶民の信仰観と、それによる生活の仕方を紹介する機会を得ました。キリスト教徒である彼らを日本の日常的信仰に改宗させようとは、もちろん毛頭ないことです。むしろ彼らに、自分がもっている信仰をよく知り、それを踏まえて一般の日本人の素朴な信仰をある程度知り味わうということを、さまざまな形で体験させるのが私の目的です。そのような体験も含めて他宗教について学んだ結果、自分がもっている信仰の中でも新たな側面と表現の可能性を発見できるようになったと語っている研修生もいます。

自己弁護かもしれませんが、自らの信仰のあり方を真剣に考えようとするキリスト教徒から最初に紹介したようなコメントがあるので、私はやはり「宣教師と人類学者」は決して矛盾していないと感じていると述べて、この話の締めくくりにさせていただきます。

ご清聴、ありがとうございました。

【司会（宮脇）】　クネヒト先生、ありがとうございました。時間が少しありますので、フロアのほうから先生にお聞きしたいことなどがありましたら、受け付けたいと思いますので、どなたか質問やコメントのある方は挙手をお願いいたします。

【宮沢】　人類文化学科の宮沢千尋です。今日はクネヒト先生のパーソナル・ヒストリーということも交えながら、人類学研究所との関わり、あるいは、人類学研究所の活動についてお話をいただいて、非常に学ぶところが多かったと思います。

最初の山田先生のお話にもありましたが、人類学研究所のあり方に対して、人類学研究所をつくることを提唱したシュミット自身は、実際の研究所のあり方には不満をもっていたというお話がクネヒト先生からもあったのですが、その辺を具体的に、もう少し詳しく教えていただきたいと思います。

【クネヒト】　この不満ということは、私はタイトルの中でも仄めかしているある問題なので

す。つまり、人類学の研究をどのように宣教活動に役に立つものにすることができるかの問題なのです。これは、シュミットという宣教師が人類学者として一生考えていた問題です。

なお、南山大学の人類学研究所を設立した人も、あるいは、そこで働いていた人も、最初の段階においては、みんな神言会の宣教師です。場合によっては、専門的に研究ばかりに没頭して、他に何も考えていない人もいれば、そうではなくて、ずっと学問に対して何かの疑問をもっていて、「私の仕事は本当にこれでいいのでしょうか」というような人もいました。

シュミットの時代からあった考え方、つまり専門的な研究はどうしても必要で、それを真面目にやらないと駄目なのです、そういう考え方があったが、しかし、宣教活動に向いている人にも任せればいいわけです。ただし、宣教師たちが相手の文化を知らないと、ちゃんと勉強しなければ、うまく宣教活動もできないというように彼らは考えたのです。

そうすると、一つのギブ・アンド・テイクではありませんが、それに似ているような感じといえます。つまり、私が言いましたように、シュミット自身は宣教師でもなく、一般的な意味での専門的な学者でもありません。先ほど山田先生が言われたように、彼のあの大きな著作は、すべて独学で作られました。大学で勉強したのは1年か1年半ぐらいの言語学だけです。しかし彼は、働くことについて秀でた能力をもっていました。もちろん、みんながそうだというわけではありませんが、彼がいつも言っていたのは、宣教師の知識をより正確にするために、彼が言語学を教えていた神学院において、若い人たちに聞き方や習慣の観察の仕方を教えて、そして送るということです。

彼は、いわゆるフィールドワークもやっていません。しかし、彼の弟子の中には、フィールドワークをとても活動的におこなう人がいました。南山大学で一時教えた M. グジンデを初め、ピグミーの研究者であった P. シェベスタなどのフィールドワークはシュミットがアレンジして、彼らに必要な費用を集めるまでに世話したわけです。そういうものです。ですから、そういう意味で彼は確かに、いわゆる大きな傘の下で見れば、宣教活動に大きく貢献したと私は思います。

【司会（宮脇）】　では、時間になりましたので、クネヒト先生のご発表はこれで終わらせていただきたいと思います。先生、どうもありがとうございました。

参照文献

折口　信夫
1929　『古代研究　民俗篇　1』大岡山書店。
1930　『古代研究　民俗篇　2』大岡山書店。
Schmidt, Wilhelm
1899　“Die sprachlichen Verhältnisse Ozeaniens (Melanesiens, Polynesiens, Mikronesiens und Indonesiens) in ihrer Bedeutung für die Ethnologie,“ *Mitteilungen der Anthropologischen Gesellschaft in Wien*, pp. 245-258.